

日本デンマーク物語

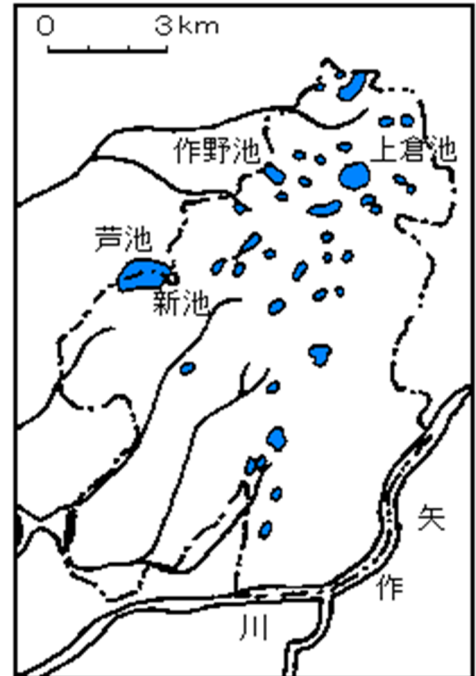
1 原野に水を通す

大小のため池が点在する台地

明治用水が開通する以前の安城市域は、矢作川などの川の流域の低地を除き、大部分が碧海台地とよばれたキツネやタヌキの住む、小松や雑木の原野でした。人々は台地の先端などに集落をかまえ、限られた耕地で生活していました。台地上では、ため池や井戸で水を確保し一日中、水をくみあげる作業におわれなければならないほど、水の苦労は絶えませんでした。

「明治用水の開けない以前の碧海郡の耕地は1200町歩の田地に対して、488町歩のため池がありました。耕地に対して実に40.6パーセントのため池ということになります。中央部にある安城村は、400町歩の耕地に対して野井戸の数が3700もありました」といわれたように、碧海台地には、大小のため池が点在し、田畑にはハネツルベが林立していたようすがうかがえます。

中でも高棚村の芦池や今村の上倉池は、50ヘクタールをこえる大きなもので、現在の秋葉公園(4ヘクタール)が13個以上もはいるほどでした。おもなため池は、芦池(高棚町、55ヘクタール)、上倉池(今池町、52ヘクタール)のほか、八万池(里町、28ヘクタール)、作野池(篠目町、28ヘクタール)、新池(高棚町、25ヘクタール)、大山田池(池浦町、12ヘクタール)など。ほかにも、石橋池、荒曾根池、毛賀知池、天草池など、現在も地名として残っているものを含め、全部で80個余りあったといわれています。(1町は99アール)



ため池のあったようす

それ、水がきたぞ



この不毛の原野に川を堀り、矢作川から水を引きこもうと計画したのが、和泉の豪農で代官もつとめた都築弥厚でした。今から170年以上も前のこと、弥厚は5年の歳月をかけ、高棚の和算家、石川喜平と協力して私費で測量を行い、幕府の援助を取り付けました。しかし、領主や農民の猛反対にあい、命をかけ全財産を投じた大事業計画は、志半ばにして完成をみることなく、弥厚は過労で倒れてしまいました。

弥厚の用水計画から30年後、その計画を受け継いだのが、伊予田与八郎と岡本兵松です。今の豊田市南部の地主だった与八郎は、水害をなくすための排水路計画として、幕末に許可を願い出ましたが、幕末の混乱期で、なかなか許可がおりませんでした。やがて、明治維新となり、地租改正や廃藩置県など世の中が一変し、計画は一時絶えてしまいます。明治新政府の施策が実行されていく中で、兵松は弥厚の用水路計画を受け継ぐ形で、出願していましたが、2人の計画は、愛知県の指導で合併し、共同で進めていくことになります。それでも、反対農民への説得や工事費の調達に手間取り、何年も走り回らなければなりませんでした。

計画の合併から6年後の明治11年(1878)、ようやく農民の説得と民間からの資金工面ができ、県の許可がおりました。翌12年1月、県の主導で工事は始められました。まず、水源から上倉池までの本流が掘られます。初め川幅3間(5.5メートル)と約束されていたものが、実際には4間(7.3メートル)に掘られました。今の豊田市永覚町付近は、低い田のある谷間に、水路を通さなければならず、工事は困難をきわめました。長さ200メートル以上にわたる低地に、幅60メートル 高さ7メートルの土盛りをし、その上に水路を作る、というものでした。



翌13年1月には、上倉池から分流して1本は、台地を南下し再び矢作川へおちる水路(現在の東井筋)、もう1本は、台地中央部を横断して衣浦湾へおちる水路(現在の中井筋)の工事も始まります。最初の計画にはなかった、猿渡川の北を通るもう1本の幹線(現在の西井筋)も掘られました。水がほんとうに流れるのかと疑っていた 農民たちも、蛇がはうように、のろのろと流れてくる泥水をみて、みんないっせいに「それ、水がきたぞ」と大声で叫んだといえます。中には、両手を上げて万歳する人、うれし涙にくれる人などいて、みな歓喜しました。

2 原野を開き、村から町へ

血管のようにはりめぐらされる水路



「用悪水」もその支流の一つです。

碧海郡用水とか、安城ヶ原用水とかよばれていたこの用水路は、明治14年(1881)、明治の世を代表する世紀の大事業との意味をこめ、「明治用水」と名づけられました。3本の本流だけでも全長50キロに及び、並行して分水路支流工事も活発に進められました。その数は、中井筋51、東井筋20、西井筋23と西三河一円にはりめぐらされ、その水路延長は428キロ、三河安城駅から新倉敷駅の先まで達する距離です。市街地を横断している「追田

完成を祝って創建された明治川神社には「疎通千里 利沢万世」と 内務卿松方正義が詠んだ竣工記念碑が建っています。まさに、荒地を貫いて張りめぐらされたこの用水が、その恩恵を万世にも及ぼすであろうというものです。

荒地を次々と水田に

長い間、水に苦しめられてきた農民は、通水が始められると、次々に開墾に着手していきます。山林、原野、ため池はことごとく水田に変えられ、畑も水田化されました。通水5年後の明治18年(1885)には、かんがい地面積4600ヘクタールを超え、50年後の昭和12年(1937)には 8100ヘクタールを上回り、用水開削前は市域の4分の1ほどしかなかった水田面積は、開墾により約4倍に増えていきました。

この急激な転換をやり遂げた安城の農民の努力は、並大抵のことではありませんでした。開墾クワは重さ約4キロ。ひとくわひとくわ振り上げては打ちおろし、ねばり強い赤土の原野を、朝から夜遅くまで切り開いていきました。開拓時代の安城をうたったものに、次のうたがあります。

嫁にやるなら安城にやるな
年がら年中野良仕事

特に、ため池の開墾は困難を極めたといえます。この時期、開拓農民により作られた村々に、里町東山、池浦、二本木、石井、高棚町新池などがあります。



明治用水の流れ

3 日本デンマークへの道

やせ地を代々にわたって工夫改良

碧海台地は次々と開墾され、耕地面積は年々増えていきました。しかし、開墾して水を通せば米ができるわけではありません。洪積層の台地は、有機質に乏しいやせ地ばかり、次に農民を苦しめたのが土じょうの改良でした。ゴミや下肥を集め、わらや緑肥(れんげ)をほどこして、

農民たちは人知れぬ努力と研究を重ねなければなりませんでした。土じょうは5年や10年で改良できるものではなく、親子2代3代と続いて改良と工夫を必要としました。今でも「福地」「乾地」と呼びわけることがあるのもそのためです。



農民の努力と工夫の結果、大正の初めころには、開墾地の方が肥料を多く必要とし、収穫量はやや少ないものの、二毛作が容易にできるようになり、古田と新田を比べても、所得はほとんど同じになるまでに向上しました。

その背景には、安城農林学校や農事試験場を中心とする各種の農業指導機関が、地域に集中的に配置され、その機能を十分に発揮していったことがあげられます。わけても、町村合併により誕生した安城町農会は、山崎延吉の指導の下、農業の指導奨励を盛んに行いました。農会は、明治31年(1898)に成立した農会法により設立されたもので、全国各地にありましたが、安城町農会は、規模が大きく組織も整備されたものでした。

米の単作から多角形農業へ

西三河地方は、明治30年代まで三河木綿の産地として綿花の栽培がさかんでした。しかし、資本主義経済の発展とともに衰え、養蚕に変わりました。畑地は次第に水田化し、明治末期には水田単作地域となっていきました。おりしも、第一次世界対戦後の農産物価格の下落に直面。農村は不況にみまわれ、米作中心の農業のへい害をあらわすことになりました。



町農会では、機会あるごとに「講習講話会」などを開き、共同経営と商品作物導入の必要性を説きました。こうして、集落を単位とした共同購入・共同販売を実践する「産業組合」が育成され、商品作物の導入による「多角形農業」が形成されていきました。

多角形農業は、自然災害や農産物価格の変動による危険を分散させ、労働力を適切に配分することをねらって奨励されました。大正12年(1923)ころ、山崎延吉は「米と養鶏とを組み合わせる平行線農業、米と蚕を春から秋までやり、冬の仕事に鶏を肥育すれば三角形農業、さらに宅地や畑に野菜を作るようにすれば四角形農業、これに果樹を加えれば五角形農業、さらに加工が加われば六角形農業」と説いています。



実際には、1農家で多角形経営を行った例は、それほど多くなく、せいぜい三角形まででした。しかし、三角形でも米の単作に勝ることは確かでした。町農会は、1農家で多角形経営することは、労働過重におちいることを見通し、それぞれの集落を単位とした適地適作主義を提唱しました。里はスイカ、赤松は鶏、横山・箕輪は梨といった具合です。こうして、各地域に即したものが作られ、組合により共同出荷されるようになり、農業の合理化・近代化をいち早く進めていきました。安城を中心とした碧海郡の農業は、その後の農村不況を見事に克服し「日本デンマーク」への道を 着実に歩んでいきました。

4 百わりょうらの農都・安城

安城は農民のメッカの地に



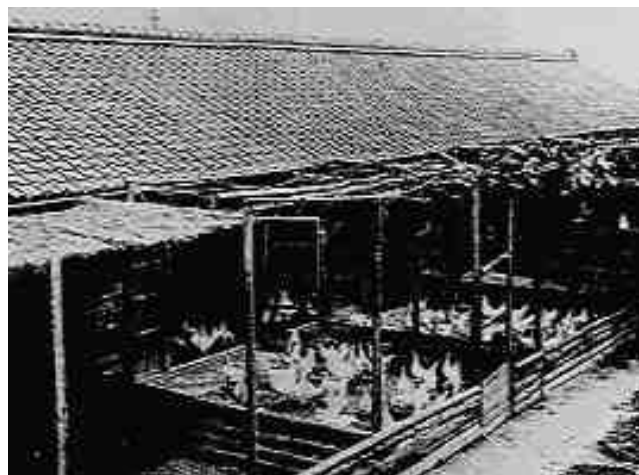
大正末期から昭和初期(1920年代～1930年代)にかけて、碧海郡一帯を「日本デンマーク」と呼ぶようになりました。碧海郡農業の発達は画期的で、米麦の単作から脱皮して、積極的に養蚕・養鶏や梨・スイカ・トマトなどの園芸作物を農業経営に取り入れ、経営の合理化をはかっていきました。また、産業組合や農事改良実行組合を組織して、苗や肥料などの共同購入、共同栽培、共同防虫から生産物の有利な共同販売まで一貫した共同化が進められていきました。

日本デンマークの名が全国的に知られるようになると、視察者が続々と安城駅に下り立つようになりました。安城は農民のメッカとなり、農業関係者にとって、一度は見ておくべき所となったのです。視察者は、まず安城町農会館(農民館)を訪れ、さらに模範的多角形農業とされた板倉農場や農事試験場、農林学校、農業補習学校などの指導研究機関を見て回りました。

養鶏王国となった碧海郡

昭和6年(1931)碧海郡の農業生産額を種類別にみると、米麦が52パーセント余りで、主力産物となっていますが、養鶏やそ菜・果樹などの園芸作物も大きな割合をしめています。大正9年(1920)と昭和6年を比較してみると、10年あまりの間に、米麦の生産額は 約3分の1に減少しているのに対し、卵の生産額は、約3倍に増加しています。

当時、碧海郡は日本一の養鶏地といわれ、その発展はめざましく、農家収入の重要な部分をしめるまでになりました。鶏卵の販売は当初、個人販売と各集落の養鶏組合による共同販売の方式を取っていましたが、大正12年（1923）、代金回収の円滑化をはかるため、碧海郡購買販売組合連合会（略称丸碧）が、鶏卵販売の一切を行うようになりました。丸碧では、各農家から集卵され、大きさごとに選別されたものを、丸碧の商標入りの箱につめ、安城駅から貨車1両に積み、毎日、東京市場に運んだといいます。



いちはやく農産物をブランド化



商品作物として特に積極的に栽培されたものに「梨」と「スイカ」があります。梨は、明治の中ごろ、横山地区で栽培されたのが始まりで、熱心な研究と努力で市域全体に広まっていきました。大正3年には安城梨業組合を設立し、共同出荷、販路の拡大、品質の統一に努め、「安城梨」「三河梨」の商標で各地に出荷されました。

スイカは、農村不況を乗り切る一環として導入されたものです。安城園芸組合により共同販売され、「三河スイカ」の商標と「大黒印」のレッテルで、東京をはじめ全国に出荷しました。生産地は市域全体に広がりましたが、中でも赤松と今、里地区が中心でした。

昭和4年（1929）には、碧海郡内の園芸組合や農家を株主として、農産物の加工会社「三河食品株式会社」が作られ、トマトやスイカなどを原料とした加工食品や、たくあん漬などの製造を始めました。しかし、この会社は結局経営不振で昭和11年には大手資本に買収されました。



碧海郡農業の著しい発展は、各種商品作物の導入による多角形農業と、農家の共同・協調による産業組合の発展を軸にしてきました。そこには、数多くの有能な指導者・研究者を輩出した農林学校をはじめ、農事試験場、町村農会、郡農会など農業指導機関の連携があります。

安城町農会は、昭和6年(1931)に、全国でもめずらしい町農会経営の図書館「安城農業図書館」を設立。また、仏教会と共同で昭和3年から町内16カ寺に「農繁期託児所」を設けるなど、多方面の活動をしています。さらに、昭和10年には、丸碧の経営による更生病院が創立され、郡内唯一の総合病院として農民の健康と、社会福祉の向上に大きな役割をはたしていきました。



くずれた多角形農業

昭和6年(1931)、満州事変がぼつ発。非常時の名のもと、生活のあらゆる面で、統制が強化されていきました。「食糧の兵なり。米の増産1割、麦の増産3割」のスローガンのもと、食糧増産が強力にすすめられ、多角形農業を支えていた商品作物の栽培は制限。労働力不足も重なって、多角形農業を続けていくことはできなくなりました。

それに追い打ちをかけたのが、戦争末期、突然襲った2度の大地震。昭和19年12月の東南海地震と翌20年1月の三河地震により、市域は南部の桜井・明治地区を中心に壊滅的な被害をうけ、その復旧のめどがたたないうちに終戦を迎えることになりました。

(広報あんじょう特集 1991.1.1) 本特集は神谷素光氏から資料提供を受けました。

日本デンマーク農業から学ぶこと

人と人が機能的にからみあい開花



今日では、日本デンマークといえば安城、安城といえば日本デンマークといわれるようになりました。本来は、碧海郡地方をさして「日本デンマーク」といていたのです。ほぼ明治用水のかんがい地域全域をさしていたわけで、日本デンマークのもとには、明治用水の開削があるのです。

ところが、日本デンマークとは、何をさしているのかといわれると、一言では説明できないのです。語意のイメージとしては、農業国デンマークと似ている所、ということならば、だれでも同感してくれるでしょう。しかし、デンマークのように酪農を主体とした農業はしていないのですから、どうしてデンマークなのか訳がわからなくなります。似ていなくて似ているところを求めるならば、農業の近代化をいち早く実行した、ということになります。ここでいう近代化とは、農産物を商品化して売り出したという

ことです。今日では、物の規格をそろえたり、商品名をつけることは当たり前ですが、それをいち早く取り入れ、市場を開拓していったのです。デンマークでは、バターとチーズ。安城地方では、卵・スイカ・梨・ダイコンキリボシなど。今の言葉でいえば、ブランド化ということです。

それには米づくり一辺倒から抜け出して、多角形農業に転換したことにあるといえます。いろいろの農産物を作るだけならどこでも作れます。それを商品として規格化し、市場に出していくことができれば、何にもなりません。それを安城地方では、産業組合が中心となって共同販売をし、市場の開拓までも行いました。丸碧の卵やダイコンキリボシ、安城梨、三河スイカなどがそれです。

昭和の初め、全国から日本デンマーク安城へ多くの視察者を迎えました。その一人が「何も変わったことはないじゃあないか」といった感想を述べた、といわれています。大方の視察者がそうだったのかもしれませんが。たしかに、多角形農業は、静岡や奈良地方でも行われていて、何も安城が専売とはいえなかったし、産業組合も全国的に組織されていたから、当然のことだといえます。

しかし、何事も外見だけではわからないものです。見落としてほしくないことは、「多角形農業という生産方式」に加えて、「産業組合による共同販売方式」がタイアップしたことです。農家と産業組合と農会、三者が一体となって経営と運営にあたっていたからだといえます。

そこには、リーダーとなる「人」を得ていたからこそできたのです。安城地方には、それぞれの組織に、リーダーとなるすぐれた人がいたことが、いっそう、日本デンマークの名を高めることになった、といえます。農政全般にわたっては山崎延吉先生、農事試験場には岩槻信治さん、農会には岡田庄太郎さん、産業組合には岩瀬和市さん、といった人たちが、日本デンマーク農業を支えていたということです。



だから、日本デンマークを従来のように分析的にとらえて説明しても納得されにくかったのです。人が抜けていては働きは出てこない、ということです。日本デンマークを構造的にとらえ、安城地方が日本デンマークと称されるようになった訳は、1農地の拡大、2農業教育の普及、3多角形農業の導入、4共同販売方式の推進、にあったといえましょう。そこには、必ずすぐれた人材がおり、努力と工夫を重ねていました。機能的にすぐれていたのだと思います。

(広報あんじょう特集 1991.1.1) 神谷素光